

映画「ラジオ・コバニ」

2018年5月12日(土)よりアップリンク渋谷、ボレボレ東中野ほか全国順次公開



「ラジオから聞こえる『おはよう』が、今日も街に復興の息吹を届ける」。映画「ラジオ・コバニ」の案内チラシに書かれたこのことばを読んだ時に、東日本大震災の被災地での「ラジオの力」を思い起こしました。子どもの安否がわからないまま、水や食料を求めて町を彷徨わなければならなかったその時に、ラジオから聞こえてきた「必要としている情報」と「ひとの声」が生きていることを支えてくれた、という友人の話の思い出しながら「ラジオ・コバニ」の試写会に出かけました。

監督・脚本：ラベードスキー
出演：ディロバン・キコ
2016年/オランダ/69分/クド語/
2.39:1/カラー/ステレオ/DCP

シリア北部のクルド人街コバニはISとの戦闘で瓦礫と化しました。映画はブルドーザーやスコップでの遺体の掘り起しの場面から始まります。「兵士でなくともできることがある」と手づくりラジオでの放送を始める女子学生。そのラジオから流れるクルド兵へのインタビュー。「なぜ子どもを撃ったのか」「IS兵を撃ち倒して、マフラーを取ると子どもの顔だった。撃たなければ自分がやられていた(沈黙)」。この戦争は何のため、誰のための戦争なのか。コバニの人びとにとって何の意味があるのか。この歴史をひも解けば、ますますそんな思いを馳せる「ひとの声」に思えました。そしてまだイスラエル軍の空爆で瓦礫と化した状況下にいるパレスチナ・ガザの状況にも通じるものを感じました。 幕田恵美子(まくた・えみこ/ATJ)

映画「ラジオ・コバニ」公式サイト <http://www.uplink.co.jp/kobani/>

お知らせ PtoP NEWSは2018年4月より偶数月の発行となります。隔月発行になりますが、これまで以上に面白い誌面作りにも励んでいきますので、今後ともよろしくお願いいたします。



特定非営利活動法人APLA (Alternative People's Linkage in Asia)
フィリピン・ネグロス島の30年以上の経験を活かし「農を軸にした地域づくり」のためのネットワークの構築を目指して、出会いや交流の場の創造を進めています。 www.apla.jp

株式会社オルター・トレード・ジャパン (ATJ)
パラゴバナナやエコシュリンプなどの食べ物の取引で、生産者と消費者の顔と顔が見える関係でつなぎ、人と人、自然が共生できる社会づくりを目指しています。 <http://altertrade.jp>

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15サンライズ新宿3F
TEL03-5273-8160 FAX03-5273-8667 MAILinfo@apla.jp

過去のPtoP NEWSはこちら [過去のPtoP NEWSはこちら](#)
[特定非営利活動法人APLA](#)

人から人へ PtoP NEWS vol.25 2018.04



特集

学校菜園から地域の食や農を変えていく
東ティモールでの挑戦



就学前の子どもたちも畑でイキイキ

働くモチベーションをあげる 全従業員が加入している互助組合

ワヤン・プトウ・ユリ・ハルトノさん(ROSTRUM組合長)
from インドネシア



エ コシュリンプが日本に届くまでには、沢山の人が関わっています。「生産者」ということで、粗放型の養殖池でエビを育て収穫する人(「農民」と呼ばれます)がフューチャーされることが多いので、今回は、収穫されたエビを日本に届けるための加工を担当するオルター・トレード・インドネシア社(ATINA)の従業員を紹介したいと思います。ATINAの全従業員が加入している互助組合ROSTRUMで組合長をつとめるワヤンさん、書記のインドラスワティさんに話を聞きました。

「ATINAでは、季節的な労働者も含めて約250人が働いています。養殖池をバイクでまわる監査員、工場での加工(頭取りや殻剥き)をする工具、ガードマン、従業員向け食堂の調理スタッフなど、なかなかの大所帯ですが、『安心安全で美味しいエコシュリンプを輸出する』ため、それぞれが自分の仕事に誇りを持って働いています」とワヤンさん。彼自身は、ROSTRUMの事業として工場内で使用する石けんの製

民衆交易を陰で支える現地の方々を紹介します!



造を担当しています。そう、ATINAの工場では、工具の手洗いから工場内の設備の洗浄、ユニフォームの洗濯まで、全てに石けんを使うことで地域の環境を汚さないように配慮しているのです。

組合員は出資金65,000ルピア(約550円)と月々の積立金20,000ルピア(約160円)を払うことで、主に2つのサービスを受けることができます。ひとつは小規模融資で、子どもの教育費や緊急の医療費の他には、バイクや電化製品の購入費に充てる組合員が多いそうです。もうひとつが日用品の共同購入。お米、食用油、砂糖、赤ちゃん用の粉ミルクや紙おむつなど、組合員から注文をとって共同購入をし、それを工場内で受け取るようにしています。ATINAでは女性も多く働いているため、買い物に行く手間が省けると好評とのこと。このように互助制度が充実していることは、一人ひとりの仕事へのモチベーションにもつながっていると言います。

最後になりますが、実はROSTRUMは、エコシュリンプだけでなく、チョコレート「縁の下のカ持ち」でもあります。パプア州から届くカカオを製菓原料に加工する工場に送ったり、最終製品のチョコレートを日本に輸出したりする手伝いもワヤンさんたちが担当しているのです。余談ですが、インドラスワティさんは「パプアのチョコレートを食べさせてもらったことがあるけれど、正直言って苦すぎて私たちの口には合わなかったわ」と笑っていました。

野川未央(のがわ・みお/APLA)

液体石けん製造中のワヤンさん



ATINAのエコシュリンプの詳細はオルター・トレード・ジャパンのサイトへ <http://altertrade.jp/ecoshrimp>



特集



学校菜園から地域の食や農を変えていく

～東ティモールでの挑戦～

from 東ティモール

学校に植えるバナナの苗を家から持って来た子どもたち

コーヒー産地のエルメラ県は栄養不足

東ティモール民主共和国の独立(主権回復)から今年で16年。平和が訪れてから人口は増え続け、現在では人口の半分が20歳以下の子どもたち、という状況は「超高齢化社会」を迎えつつある日本とは正反対です。一方で、5歳未満の乳幼児死亡率は、1000人あたり53人という東ティモール。少しずつ状況はよくなってきているとはいえ、5歳未満の子どもの約50%が栄養不足によって身体の成長に影響を受けていると報告されています。そして残念なことに、コーヒー産地のエルメラ県は、子どもの栄養不足の状況が全13行政区のうちワースト1位なのです。

コーヒーの生産でまとまった現金収入があるはずなのに…。そう考

える方も少なくないかもしれませんが、コーヒーの収穫シーズンは1年のうちたった3カ月程度。それ以外の時期は、細々と農業をしたり、出稼ぎに町に出たり、何とかしてしのいでいる。そんなコーヒー生産者が大半です。そのため、オルター・トレード・ティモール社が日本向けのコーヒーを買い付けている生産者の地域で、コーヒーだけに頼るのではなく多様な収入源を確立できるように、と様々な取組みを続けてきました。しかしながら、限られた収入のなかで家計をやりくりしなくてはいけない人びとにとって、(しかも子どくさんの大家族にとって)家族のお腹をいっぱいにするのが精一杯。毎日の食事の栄養価まできちんと考える、というのはたやすいことではありません。

子どもたちに食や農の大切さを

APLAと一緒に活動している環境活動家のエゴ・レモスさんの努力もあり、東ティモール政府が2013年から進めてきた教育改革の一環で、国内全ての公立小学校で「学校菜園(エディブル・スクールヤード)」を設置し、その菜園をつかった総合的な教育を実践する、という画期的なプログラムがカリキュラムに組み込まれました。

学校菜園の活動の目的は、大きく分けて3つあります。ひとつめは、子どもたちが、学校菜園で協力して土を耕し、様々な野菜や果物を育て、収穫することで、自分たちの命を支える食や農の大切

さを学ぶ機会を得ること。ふたつめは、子どもたちが学んだことを家に持ち帰って、お父さんやお母さんにも伝えて、一緒に実践できるようになること。地域全体が変わっていくこと。そしてみつめは、生きた実験室が各小学校にできること。これについては、先生たちへのトレーニングが必要とされますが、将来的には、学校菜園を生きた実験室として、教科書だけに頼ることなく、言語、算数、芸術、化学、栄養、環境などを子どもたちが学べるようになることが期待されます。



日本のエディブル・スクールヤードの取組みを見学するエゴさん

コーヒー産地での学校菜園普及をめざして

「学校菜園の活動を5年、10年と続けていけば、東ティモールの子どもたちの栄養不良の問題は確実に減らせると信じています」と語るエゴさん。APLAとしても、その実現を強く願っており、これまで収入の多様化などに一緒に取り組んできたコーヒー産地を中心として、エルメラ県内の公立小学校で学校菜園が定着していくための活動を2年ほど前から展開しています。

カリキュラムには組み込まれたものの、教育省の予算の都合で、学校菜園の設置・運営については現在のところ各学校の自主性に任されているのが現状です。日々の授業に関する仕事で手一

杯の先生たちに対して、手弁当で学校菜園の設置・運営のために動いてもらうことはなかなか望めません。まずは、わたしたちが背中を押して、コーヒー生産者の子どもたちが通う学校で、先生や生徒、父母と一緒に学校菜園を設置するところから始めてみよう、となったのです。これまでに学校菜園を設置できたのは3校、その学校の分校の先生たちへの研修も実施しており、今後さらに多くの学校で学校菜園の取組みが進められるように、引き続きサポートしていきますので、ご注目ください。

野川未央(のがわ・みお/APLA)



みんなで作った学校菜園

